
World Revolution!

澄江春樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

World Revolution!

【Nコード】

N9177Z

【作者名】

澄江春樹

【あらすじ】

世界革命 というモンスターが世界各地に住みつく事件が起きて、約十年。ぐーたらゲーマー主人公・天江一稀は岩崎奏という女子と会って、その真実に少しずつ近づいていく。——という物語を創っていききたいです。初投稿です。なので文章が見苦しいものになるかと思いますが、ところどころ直していきます。

プロローグ（前書き）

初めまして澄江です。

初投稿なので見苦しい文章ですが、よろしくお願いします。

プロローグ

世界は変わった。

悪い意味ではない。いい意味でだ。

都市部には最新式の高層ビルが建ち並び、最新技術を使った電光板などがいくつもある。都市部でなくとも明らかな科学の進歩のしるしがあり、それは見ている者の目に華々しい印象を与えた。といっても進歩が急激すぎて一般家庭には普及してないのが現状なのが。

科学が急激な進歩を遂げたとき、確かに何かが起こったのは事実だ。ただその原因が分からない。その疑問を学者、研究者がこぞ調べて調べたのだが、結局核心にたどり着くことはできなかった。

世界革命。あやふやなそれは誰が言い出したのかも分からないが、いつの間にかそんな名前になっていた。

だが、科学の発展は同時に災厄を世界にもたらした。

人間を食い散らかす化け物、俗に言うモンスターが人の住まない地域、通称「ゾーン」に徘徊するようになったのだ。

一体どこから湧いてでてくるのか。どうしてモンスターが湧くのか。それらの疑問一つ、まだ人類は分かっていない。人類にとって運がよかったのはモンスター達が生息地を持っていたことだ。おかげで人間は絶滅せずにすみ、住む場所を追われてなお生き残った人

間が作った一大都市、それがここ、遙坂市だ。

日に日に進む科学技術の進歩は軍事力にも影響して、やがて撃退とまではいかないが、国民の安全を守るまでに治安は回復された。今では居住区にモンスターが進入するのを阻止するまでだ。それでも突然変異を起こした「変異種」が包囲網を破り、街中に進入するという事件や今までなりを潜めていたモンスターが進入する事件が今でも多々ある。後者は特に厄介で、犠牲の数が大きい。

今説明したように、世界は変わった――。

これは紛れもない事実だ。

世間は今でもそう言っている。

俺――――天江一稀も世界の移り変わりをいいことだと割り切つて特に気にせず生きていた。

だが、ある人物によってその生活は180度変わることとなった。

俺の人生は――――

――――岩崎奏との出会いによって一変した。

Episode 1

「ふー、ねむ・・・・・・・・」

時計を見る。針が指している時間はまだ学校に行くにはほど遠い時間だ。

「よし、もう一度だ・・・・・・・・おやすみ・・・・・・・・」

ベッドに潜り込み、寝息を立て始める。昨夜、夜通しでゲームをしていたのだ。さすがに眠い。

眠りに体を任せて数分、ドタドタと階段を駆け上ってくる音が聞こえる。

「こらーっ！ 天江家の朝は早いんだから起きて。兄さん」

我が家の妹、夏穂の高い声が耳に聞こえてきた。

「そんなかたいこと言うなよ。頼むから兄にあと五分だけでいいから寝させてくれ」

「ほんとに兄さんはダメなんだから。——もう、一人で起き

てよね、兄さん」

別に一人で起きれないわけではない。横に転がっている目覚まし時計をかけていないだけだ。それに——

「知ってるか？ 世間では妹に起こされるなんて貴重なシチュエーションらしいぞ？」

「確かにそうかもね・・・・・・・・バカ言ってる暇があったら着替えて朝ご飯早く食べちゃってよ」

だがそんな俺の言葉をバカと言って夏穂はまた下へと降りていった。

「バカはないだろ、ったく」

頭をかきながら寝間着から制服に着替え、妹に言われた通りに下へ下りる。

少しロングな髪。さっきは仏頂面を浮かべてはいたけど、素では整った顔。淡い膨らみをもった二つの双丘。それでいてモデルにでもなれそうなほど整った体型。きっとあのしっかり者は男子にさぞかし人気なのだろう。

——兄に対する仏頂面さえなければ俺も可愛いと思うんだけどなあ。



「はよー」

ドアを開け、見えてきたのは夏穂のソファアーに座りながらテレビを見ている姿、そしてテーブルの上に見える美味しそうな朝食。こういった光景にはなにか感慨深いものを覚える。

「あれ……？ 母さんが消えた」

朝、いつもキッチンに立っている母さんの姿が見えない。どうしたのだろう。

空を切った挨拶の代わりに夏穂はソファアーにあごを乗せて俺に呆れたように言った。

「一昨日から母さんは旅行でしょ？ ていうか昨日も同じこと言っただけど」

「ああー、そういえば」

俺たちの母は今回のように度々旅行に行く。

家を出る前日、リビングの隅に荷物があると思ったら翌日には、

『ちよつと母さん遠いところに用事があるから家空けるね！ 行ってきまーす！』

と書かれた書き置きを残して消えている。消えたら最後、一ヶ月

以上帰ってこない母さんは今も旅に出る理由を教えてください。

「いつも思うんだけどなんで旅行に行くんだろうね？ どこへ行くかも教えてください」

兄さんもそのことを考えているんだ、妹よ。

「さあなあ。案外父さんにでも会いに行ってるんじゃないの？」
父は元々海外に単身赴任をしている身なのでほとんど家に帰ってこない。

「それじゃ教えない理由になってないでしょ。——って早くご飯食べちゃってよね」

「はいはい」

そこからのんびりと朝食を食べた俺は支度を整えて妹より一足早く家を出て、俺と夏穂の通う朝椿高校に向かった。



「よっす、一稀！」

いつも学生で賑わっている朝の日差しが眩しい大きな通りを歩いていると、後ろから見知った人物の声がかかってきた。

「あー。朝からお前は元気だな」

顔を横に向けて横目でそいつを見る。相変わらず顔立ちは整っていて、眼鏡と黒色をメインにしている学園の制服は、その細身の身体によく似合っている。

「そういうお前は逆に眠たそうだな」

呆れたように笑っている顔は妙に憎たらしく思える。

「しょうがないだろ……昨夜は夜通しでずっとゲームしてたんだから」

山場に入ってしまったからつい熱中してしまった。

「ふーん。——ってえことは一稀、お前今日提出の筆記課題

忘れてるだろ？」

「……………え？ 課題がある？」

おいおい……………嘘だろ……………

「なら一ついいことを教えてあげようじゃないか。———今日の課題提出先は、あの『醤油』だ」

その言葉を聞いた瞬間、俺の顔は真っ青になった。

本名、阿野勇作。校内でのあだ名は「醤油」。一見あだ名を聞いただけだと恐怖などまるで感じない、むしろ可愛いと思うのだが現実は逆だ。課題を忘れたらノイローゼになるほど怒る恐怖の塊だ。そのお茶目な名前の由来は、いつも弁当に醤油を入れてくるかららしい。

身体からは冷や汗が滝のように流れ出ている。脱水症状が起きてしまいそうだ。

「……………及川。いや、及川遙斗様。俺からの一生に一度のお願いだ。課題を見せてくれ」

「俺はその一生の一度の願いを通算17回聞き入れてるんだけどな……………」

今回もかよ、と言いたそうな口調だが、それとは裏腹に表情には微笑が浮かんでいる。

「ま、いいけど。その代わりちよっと放課後付き合ってくんない？」

しょうゆ提出の課題を忘れて地獄を見るか、放課後友人の用事に付き合うか。そんなの天秤に掛けるまでもない。

王から命令を受けた従者のように身体を下に落とし、片足を立てて俺は即答した。

「喜んでお供しましょう」

E p i s o d e 1 (後書き)

感想を頂ければ嬉しいです

Episode 2

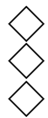
窓から日光が差し、いつも以上に暑い教室。

その教室の隅、黙々と課題を写している生徒が一人。

「ぐおお、お、終わらねー……………」

周りのクラメイトが疑うような視線を送ってくるが、今の俺にはそんな関係ない。

俺はひたすら課題とにらめっこしあっていた……………。



無事提出して、難を逃れた俺は24時間耐久で日差しを受け続けたいたゾンビばりにうなだれていた。

「くそう、まさか課題の量がここまで多いとは……………」

課題を出した鬼教師を心の底から呪っていると、見知った人物から声がかかってきた。

「あんたが家で課題をしてこないからいけないのよ」

少し呆れているような高い声。その声がした方向に俺は目をやった。

「おお……………楓か」

そう返した俺を、からかい口調でさらに責め立てる。

「あはは、どうせゲームでもやってたんじゃない？ どう？ 図

星でしょ？」

「ぐ……………ああ、そうさ、そうだよ」

当てられたことに少し悔しかったが、渋々うなずく。

「そんなことじゃ今日の授業どうすんのよ。保健室いった方がいいんじゃないの？」

「心配ない。授業は受けるさ」

「あっそ。ま、倒れても知らないけどね」

そういつて楓は自分の席に荷物を置いた。ちなみにその席とは俺の隣だ。

「それよりお前だって最近貧血気味とか言ってるんだから、自分の心配しとけよ」

俺はからかうように言ってるやつだ。

「なっ……うるさいわよ」

そう言った楓の顔には少し赤みがかかっていた。

少し黒色のかかった金髪のパニーテール。それなりに整った品性のある顔。体型は他の女子と同じように若干細いくらい。なにより印象づけるのは幾何学模様の刻まれた両腕のバンド。

そんな女子、岩倉楓は男子の人気ランキング五指の中に入る猛者だ。告白された数は数知れず。このクラスにも勇気を出して告白したが、あっけなく散っていったやつが五人程いたはずだ。

「そうでもないぞ。これでも付き合いが長いんだ。多少は心配――」

「あ、そうだ、今日の放課後空いてる？」

「……おい。どうしてそうなる」

「いいじゃない、別に。理由は特にないわ」

「んーと今日は……」

――そういえば今日は遥斗の用事に付き合ってたかな。一応地獄を見るはずだったのだから断るわけにもいかない。

「今日はダメだな」

「え？ 珍しいわね。万年ゲーム廃人or暇人のあんたが？」

「悪い、今日の放課後は遥斗の用事に付き合うんだ」

「ふーん。ならそれ、私も付き合っている？」

「それは遥斗に聞いてくれ」

どこに行くかはあいつしか知らないからな。それにこれでもし行く場所が『エロゲーショップ』とかだったらシャレにならない。

「じゃあ、ほら、あんたも1限目の準備しないと」

その言葉を聞いて俺は周囲を見渡した。確かに大勢のクラスメイトが次の授業に向けて準備している。

「じゃ、放課後の話、後でね」

「ああ」



放課後。

クラスの違う遥斗に合流して、楓も、ということを経験したところOKをもらえたので、学校から未だ名前も知らない目的地に直行している。

煌びやかな居住区を抜けて、いかにもモンスターが横から飛び出してきそうな荒れ地を歩いているところで楓から声があった。

「ねえ、結局行くところってどこなの？ 及川」

「ふっふっふ、聞いて驚くなよ。目的地とは『ゾーン』だ！」

それを聞いた途端、楓、俺と顔が歪む。

「おい………正気か？」

俺はこのご時世当たり前の質問をぶつける。楓も同じ意見らしく、「なに考えてんのよ」とうなっている。

だが、俺の問いに遥斗は、即答だった。

「あったりまえよ」

「おいおい．．．．．用事に付き合う、じゃすまないっての」
実際問題、ゾーンには学生では太刀打ちできないモンスターがごろごろいる。

「んなこというなって。好奇心だよ、好奇心」

そういう遥斗の手にはいつの間にかカメラが握られている。

「楓、どうする？」

そこで俺は楓に行くかどうかを決めてもらうことにする。

「んー、私も少しは興味はあるけど．．．．．どうしようかな」

「岩倉、ちよっと．．．．．」

遥斗が楓を手招きするように呼び、俺には聞こえない音量で楓に耳打ちする。

瞬間、楓の目が金マークになった。

「一稀、ゾーンに行くわよ！」

「え？　おい、急にどうしたんだよ」

「そんなこといいじゃない。さあ、行くわよ！」

その後ろでは遥斗がすすり泣いたような声を出している。

「少し痛い出費だが．．．．．これもやむをえん！」

「お前あいつに何したんだよ」

少し疑う表情を浮かべた俺は肘で遥斗の肩をこづく。

そんな俺を無視したかのように、わざとらしく口笛を吹きながら遥斗は歩きだした。

あっけになった俺の隣では楓が何やらつぶやいている。

「．．．．．駅前ケーキ食べ放題．．．．．ああ．．．．．」

「．．．．．楓．．．買収されてたのか．．．．．」



ゾーンにつながる道は無限大にある。ただ、ゾーン手前にある柵を越えればいいだけなのだ。

だが、政府の見回りが来るのでタイミングを見計らわなければならない。噂によると、見回りに捕まるとひどい拷問を受ける、洗脳される、などとても恐ろしいので、捕まったら最期と思っ
ていい。

やっとその入り口まできた俺は昼でも不気味なそれに思わず声をあげていた。

「ここがか……」

柵の少し手前には気味の悪いドクロマークがついた看板があり、ここには化物たちが常に跋扈してるといわれたら思わず納得してしまいきような、薄暗い印象を放つ森だった。

辺りはすっかり人氣がなくなっている。まだ昼だからいいが、夜になるとさぞかし気味が悪いだろう。

「静かに……見回り、いないか分かるか？」

噂のことを知っているのだろうか。妙に真剣な遥斗が耳を澄ませてこちらにも聞いてくる。

俺もそれにならない、耳を澄ませる。

「……いないみたいだな」

「そうみたいね」

楓が俺の言葉に相づちを打つ。

「じゃ……行くぞ」

飛び出して柵まで駆け抜ける遥斗を追って、俺たちも走った。

木々が生い茂る森の中を歩いて随分と時間がたっていた。

薄暗い印象は奥に進むにつれて濃くなってきている。

「なあ……どこまで歩くんだ？」

さすがにこれが後何十分も続くのはきつい。

「今歩いてるのは、初見じゃ分からないだろうが実は道なんだ。

ほら、足下見てみな。人の足跡があるだろ？」

「んー？ ……確かに」

と頷くのは楓。みたところ、少しバテているようにも見える。

「この道は円形状になっててな、要はゾーンを観光するために作られた道なんだよ」

「ふーん。てことは、この道は安全なのよね？」

「まあ基本的にモンスターは襲ってこないさ。……多分だけど」

「た、多分って何よ！ ……はあ、やっぱりついてこなきゃよかったかも……」

「岩倉は度胸がないなー。一稀、いざって時はお前が守ってやれよー」

「俺に話を振るなよ……」

「万が一の時はがんばってよ！ じゃないと課題見せてやんないんだから！」

「な、なにい！」

おまえは鬼か！ だが俺にはまだ生命線である便利屋が――――

「よし！ 俺も岩倉に一票！」

「便利屋、お前まで！」

「便利屋じゃねえよ！」

雑談しながら歩いていると森にぽっかりと穴が空いたような広い空間に出た。その四方にはそれぞれ銅像が置かれている。一つは人間。もう一つはモンスターと分かるのだが後二つが分からない。

「ここは．．．．．？」

俺の疑問に遥斗はメガネをクイ、と持ち上げ、自慢げに説明を始めた。

「うおっほん。ここはなんと、あの『血塗られた戦争跡』だ！

二人も教科書でなら見たことがありそうだけど．．．．．生で見るのは初めてなのでは！」

急にアナウンサー口調になった便利屋を放置し、俺と楓は同時に感嘆の声をあげた。

「へえ、ここが．．．」

「ここがか．．．．．。というかなんてお前はそんなに詳しいんだ？」

以前から何かと雑学やら知らない知識を披露していたのだが、こういうことまで詳しいとは。

「俺は以前にもその道の人と来たことがあるからね。当然ここら辺は知り尽くしてゐるってこったよ」

「相変わらずお前の交友関係は幅広いな」

こいつの交友関係は得体が知れない。どこで知り合うのか是非聞いてみたいところだ。

「ふふふ．．．．．このためにカメラを持ってきたってもんよ！ いざっ！」

カシャ カシャ カシャ カシャ カシャ カシャ カシャ．．．

隣でカメラのシャッター音が無数に聞こえる。

こんな薄気味悪いところを撮りたいなんて変な趣味だなあいつも。

「わ、私も、ちょっと向こうの銅像見てくるわね」

「おい、気をつけろよ」

カメラに夢中の遥斗の代わりに俺が忠告しておく。

「危なくなったらあんたが助けにくるんだからねー！」

んなものの保障できないってのに。

楓は元々興味があったのか、早足で銅像の方に向かっていった。

・・・ふう、一人になった、か。特別やることもないし、あの銅像にさほど興味があるわけでもない。あの二人が飽きるまで、俺はリラックスさせてもらおうとしよう。

日当たりがいい場所を選んで寝そべる。目を開けると少し曇りがかっている太陽の日が沈んでいくのが見える。鼻に意識を向ければ、森独特の匂いが鼻腔をくすぐり、耳を澄ませば辺りで聞こえてくるのは、今も楽しそうな顔であっちこっちの銅像を行き来している楓と、カメラを持ってかけずり回っている遙斗の足音が二つ。

———二つ？

途端に俺の顔が陰しくなる。

こちらで聞こえる二人の足音、それに混じって遠くから静かに響いてくる足音がある。

一、二、三個。

とても小さい音だ。偶然といえどリラックスしていた俺と違って、興奮しているあいつらには分からないだろう。そして今もなお、少しづつだがこっちに近づいてきている。

これは十中八九モンスターだ。

そうなると少しヤバイ。あいつらは無防備だから遭遇したら確実に殺されてしまう。

——まあ、俺は倒せるんだけどね。

あいつらには日頃から色々助けてもらっている。今回はその恩を返すチャンスなんじゃないか。

だが、諸事情でこいつらの前でやるわけにはいかない。てことで今から俺の方が出向いてやることにしよう。

「やい、遥斗」

「ハア、ハア、なんだい、一稀！」

ちょ、気持ちわるっ！ 興奮するにも程があるだろ！
せっかく腹くくったのにお前の性で台無しだよ！

「…………俺の膀胱が破裂寸前だからさー、ちょっと向こうの茂みで済ませてくるわ」

その返事を聞かず俺はモンスターがいると思われる茂みに足を向けた。

今にも姿を現しそうな足音に身体を緊張させながら、気配を殺す。

まあ、戻ってきて違和感がない程度に頑張っとくか。

Episode 3

あの二人に気づかれずに敵を倒すにはどうすればいいのだろうか。

無論、一発で倒すのが一番だ。

それは分かっていたはずなのに…… やっちまった。

走ってモンスターのいるところまでいったのはよかったんだけど、
どうやら見つかってしまったらしい。

足音は極力出さなかったけど、そのモンスターが犬科だったことが運のツキだった。

目前にいるのは三体の猟犬。赤い体毛を持ち、飢えた獣のように鋭い目をこちらに向けてくる。

「バウッ！ バウッ！ バウッ！」

俺を囲むようにして威嚇してくる。

一触即発の空気。

先に破ったのは猟犬の方だった。

「ガウッ！」

横にいた猟犬が土を蹴り、首元に噛みつきこうとしてくる。俺は咄
嗟に首を横に曲げた。

チッ！

うおっ、危ない！ 首元を掠め、そこから血が流れる。

また膠着状態にはいる。

俺もそろそろ反撃しなければまずい。

風の音がやけに大きく聞こえる。

俺は膠着状態のうちに右手に力を込めた。

右手にどんどん力が溜められていく。

あと、わずか数秒で発動する――――

はずだったが、そこで膠着状態が無念にもとけてしまった。

タイミングを計ったように猟犬どもが三体同時に襲ってくる。

――だが、俺の準備もその瞬間整った。

俺の右手から炎が生まれる。

瞬時にして右手から身体全体へと広がっていった炎はバリアーのように俺の身体を包み、猟犬から身を守った。

炎に身体を突っ込んだ猟犬どもは驚いた声をあげるも一旦距離をとり、警戒態勢に入る。どうやら知能は高いようだ。

さっき俺の首を噛もうとした猟犬が頭を狙って飛び込んでくる。身の程知らずにも程があるぞ。

紅蓮に包まれた右手を一振りするだけで、その姿はあっけなく灰となる。

「キャ、キャイン！ キャイン！」

その光景をみた他の二匹は恐れをなしたのか尻尾を巻いて逃げ帰っていった。

———これが俺の力『紅蓮の炎』だ。



「随分と長いトイレなのね、一稀」

「いや、すみませんホント。この通りでございます楓様」

戻ってきた俺を待ち構えていたのは悪鬼と化した楓だった。

おかしいなあ。俺、君たちを守ったんだよ？　それがどうして土下座しなきゃならんのか。だが、どうやらあの戦闘はバレていないらしい。心の中で安堵する。

それほど時間はかからなかったはずなのだが、どうも気に触ったらしい。楓からはどす黒いオーラが立ち上っているかのように見える。今にも憤怒の形相で罵倒されそうだ。

「あんたがいなかった時にモンスターに襲われたらどうすんのよ

！」

そらきた。

「その時はしょうがない。運が悪かったと思って諦めてくれ」

「——約束、してたはずよね」

だから俺その約束守ったんだって。と言いたいけど言ったら姿を隠した意味が無くなってしまいうからそこは自重する。

「というか遥斗に守ってもらおう、じゃダメなのか？」

「え？ い、いや、そういうことじゃないけど……よく分かんないけどダメ」

「なんでだよ」

本当意味分らないな。

「……はあ、なんか怒る気なくなっちゃった。さ、もう帰ろ？」

言ってすぐさま出口へ向かっていく。

相変わらずよく分からないやつだなあ。

俺も追いかけなきゃ。

「——ん？ 遥斗、なにやってんだ？」

「……なあ一稀、俺ってそんなに弱く見えるのかなあ……」

楓の「よく分かんないけどダメ」発言は遥斗の心に傷を負わせたようだ。

俺は同情の視線を送った後、みなかったことにして楓の後を追った。

辺りはすっかり夕暮れ時だ。

最初この森に入ったところに戻ってきた。どうやら遥斗の話は本当だったようだ。出口にでた俺は一度後ろを振り返り、その薄気味

悪い森の奥を覗く。やはり吸い込まれるような闇がただ広がるだけだ。

「おい、なにしてんだよ一稀。はやくこっちにこい」

少しばかり目を奪われていた俺は、遥斗の声で我に返った。見ると、楓と遥斗はもう傍にある茂みに身を移していた。

「あ、ああ。今行く」

もう少し見ていたい気もしたが、諦めて茂みに身を移す。

「……見回り、いなか分かるか？」

あれから気を持ち直した遥斗が来るときと同じ真剣な顔をして尋ねてくる。

「……いないみたいだな」

「ま、見つからないうちに速く柵を越えておかないとな。――――よし、行くぞ」

ふいに森の中にゴウツと風が突き抜けた。聞こえてきた轟音は、まるで森そのものがうなりをあげているようだ。

「何この音……早くいこ、ほら」

楓に手を引かれる。それにつられて俺も走り出した。

荒地地まで戻ってきたところで遥斗から声がかかった。

「よし、ここまで来れば大丈夫だろ」

柵を越えてからも走っていた遥斗の歩調がゆっくりになる。

「ふうー、それにしてもあまりいいところじゃなかったわね」
当たり前だろう。

「そりゃそうだ、あんな気味悪い場所をいいところだという人がいたら見てみたいもんだ」

あそこを気に入ってるなんて物好きはそうそう――――

「気味悪いなんていうな！俺みたいな人種にとっては聖地巡礼のようなもんだよ！」
ここにいたか。

さっきの荒れ地とは天国と地獄の差がある華やかな居住区につき一息ついていると、ふいに楓が俺を凝視してきた。

「どうした？　なんか俺についてんのか？」

「いや、そうじゃないけど………。あんたの裾、なんかついてるわよ？」

楓の指したところを見ると、裾にさっきの戦闘で流れた俺の血がついていた。

「いや、これは泥だ」

誤魔化せるか………？

「ふーん。それにしても今日は汗かいたわ。帰ってシャワー浴びなきゃ」

誤魔化せたようだ。だが、俺の安心と裏腹に、楓の言葉に反応する変態が一人。

「シャ………シャワーだど!？」

「ほらそこ、興奮すんな」

俺が変態に指をさすと、自分の人差し指から少し血が流れていたことに気づいた。

「おい、一稀そこ血出てんじゃねえか！」

遥斗は大げさだなあ。きつとさっきの戦闘、あるいは小枝にでも引っかけたのだろう。

「え？　ちょっと大丈夫？　———待ってて。私、絆創膏持ってるから」

楓が靴からごそごと絆創膏を取り出す。

「いや、大丈夫だって」

こんなものかすり傷だ。

「そんなこと言わないの。ほら、手だして」

ここまでされているのに断るのも気が引けてきた。俺は渋々手を出す。

「——ん、もういいわよ」

「あ、ああ。ありがとな」

シンプルな絆創膏が貼られた指を凝視し、慣れない礼を述べる。顔で、よしと頷いた楓はまた先頭を歩いていく。その姿を眺めていると、遙斗が神妙な顔で話してきた。

「……………なあ一稀。お前と岩倉が話してるとき、たまに妙な疎外感が生まれるんだよなあ」

「……………気のせいじゃねーかな」

遙斗のぼやきを気にせず、俺も楓の後を追った。

見上げれば辺り一面夜空が目映っている。

周りに店がズラリと並べられている、いわゆる商店街に出た俺たちはそれぞれ帰路にしようとしていた。

「じゃ、私はここだから。じゃあね、一稀、及川」

「じゃあな、楓」

「また明日なー、岩倉」

俺たちは各々別れの挨拶を言う。俺も早く帰って休みたい気分だ。きつと夏穂が夕食作って待ってるだろうし、早めに帰りたい。

「あ、明日の課題忘れんじゃないわよー」

姿が少し小さくなった楓から聞こえてくる声。

「だってよ、一稀」

「お、俺か、今のは。お前っていう可能性も」

俺じゃないと……………願いたい。

「お前以外いねーっての。俺はいつも課題やってるし」
「く……………」

課題なんて大っキライだよチクショー！

「あ、俺もそろそろだわ。じゃ、明日課題忘れんなよー」
分かってるよ！

「・・・もし、いや、もしね。万が一課題忘れちゃったときは頼むよ、遥斗くん」

「忘れる気満々だろ、お前！」

そ、そんなことないっす。

「じゃ、そういうことで！」

シュタツ！

俺は遥斗の言葉を聞くまいと走り帰った。

E p i s o d e 4 (前書き)

今回は物語にはあまり関係ありません。けど一応やっという方がいいのかな、と思ったので、書きました。

Episode 4

「おかえりー、兄さん」

「おう、ただいまー」

家に帰ってダイニングに向かうドアを開けると、夕食のいい匂いと、夏穂が最近取り替えたばかりの木製ダイニングテーブルの椅子に座って待っていた。

「それにしても今日は遅かったね。どこ行ってたの？」

今日はゾーンに行ったんだ、なんて言えば心配されるどころではなくなくなってしまいうから誤魔化さなければ。

「あ、ああ。ちよつと遥斗とゲーセンに行ってた」

「んー、そっか。ほら、はやく座って座って」

夏穂の言うままに俺はダイニングの椅子に座った。

「いただきます」

俺に続き夏穂も、

「ん、いただきます」

今日の夕飯はカレーだった。それにしてもさすが夏穂だ。よくできてる。

「んー、やっぱうまいなあ。そこらのファミレス以上の腕前だよ、夏穂は」

「お、おだてても何もでないって、兄さん」

おだてたわけじゃなく、本心からそう思っているんだけどな。

「そういえば、今日お前は何してたんだ？」

「今日はね、友達の家にお邪魔してた。まあ、帰ってきてからはゲームしたり、テレビ見てただけだね」

「へえ、そうか」

それから黙々と二人とも食べ続けるが、気まずい空気は流れていない。むしろ居心地のいい空気が流れている。やはり夕食の空気はこうでなくちゃ。

「あ、兄さん。これ食べ終わったら一緒にゲームしよう？」

夏穂がカレーにふうふうと息を吹きかけ、熱いのを冷まそうとしながら俺をゲームに誘ってきた。別に食べ終わってからは何の予定もなく暇だったのだ。どうせだから誘いに乗っておこう。

「やるよ。これから暇だし。——で、なんのゲームをするんだ？」

「それはね——」

それとはRPGだった。なんでも今日発売されたばかりの超人気商品だとか。このゲームは現実で実在するモンスターをそっくりそのまま持ってきたらしい。

この時代の技術では仮想アバターを用いて意識をゲームの中に入り込ませるまでのものが完成している。このゲームもその技術を使っているみたいだ。

夕食を食べ終え、食器を下げ終わった夏穂がゲーム本体をテレビに接続し、スイッチを入れる。すると前面のテレビモニターに、タイトル画面が映し出された。

『Blood of Last』

「なんつーか、グロそうな感じだなあ」

俺がタイトル画面を見た素直な感想を述べると、

「そんなんじゃないよ。このゲームはね、政府が国民にモンスター
の恐ろしさを知ってもらうために作ったゲームらしいの。だから
すごいリアルに作ってるらしいよ?」

「ふーん。なんつーかシビアだな………よっこいし
よつと」

そういいながら俺はソファに腰を下ろす。

「じゃ、兄さん。これかぶって」

そういつて差し出されたのは被り物(?) みたいなやつで、これ
をかぶってスイッチを入れれば意識がゲームの中に入るらしい。

かぶった俺はサイズがピッタリだったことに驚いた。

そのことに気がついたのか夏穂は口で説明してくれる。

「ふう、本当なら家族四人でやるはずだったんだから。兄さんの
がピッタリなのは当たり前ってこと」

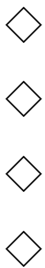
へえ、そうだったのか。てことはここにもし母さん、父さんがい
たら一緒にやっていたのか。

「じゃ、スイッチ入れるね?」

俺は顔で頷く。

「三、二、一、はい!」

その瞬間、俺の意識はブラックアウトした。



「もほ………ここは………?」

目を開けると辺り一面草原だった。風がなびく音がとても心地よ
く、地面の感触がなぜか気持ちいい。ここまでリアルに作るとは恐
ろしい限りだ。

「んーと、ちょっと待ってて」

いつの間にか隣に戦士顔で立っていた夏穂が手に持っているガイドブックを読む。

「ここの名前は……『草原』だって」

「そのまんまだな」

もうちょっとマシな名前は思いつかなかったのか。

「ん………？　ていうかどうして顔も身体もゲームの中なのに同じなんだ？」

今頃気づいたが、ゲームの中であるはずなのにリアルの身体とそっくりだ。

「それは私が全部セッティングしたんだよ。けっこう大変だったんだから」

へえ。それは感謝しなければ。

「えーと、『この草原には低レベルのモンスターが多数出現します。最初は初期装備ですが、倒したモンスターの素材を鍛冶屋に持って行けば上位の装備を作り出せます』だってさ」

初期装備………？　身体を見渡してみると、確かに腰に剣がささっている。他にどんなのがあるのかと頭上に浮かんでいるメニユー画面をタッチし、ステータスを表示させた。

レベル…5

装備…『錆びた剣』

攻撃力…10

防御力…5

敏捷性…7

素早さ…7

命中率…8

回避率…10

知能…3

スキル…『索敵』

知能低すぎだろ。これってバカってことじゃないか。

自分のステータスに落胆した俺は、夏穂に「ま、まあ運が悪かったと思って、ね？」と慰められながらも森の中へと歩を進めた。

鬱蒼とした森の中を歩いていると、前方に粘着上の物体が現れた。『スライム』と頭上に表示されているのを見て、思わず「うわあ」という声を漏らす。

見えてネチャネチャしているのがとにかく気持ち悪い。

「なあ、アレどうすんの？」

とりあえず、夏穂に聞いてみる。

「とりあえず初心者の兄さんとはにかく斬って斬って斬りまくるのがいいんじゃない？」

生憎だが、リアルの方では初心者じゃないけど。

だが、刀を使って戦うのは初めてなので、アドバイス通りにしておく。

「はあ！　せいっ！　せいやっ！」

闇雲に振り回した刀は側面に二回、頭上から一回当たり、スライムはその姿を白い光と共に散らせた。

「一回目にしてはすごいじゃない兄さん。………といってもアレ、レベル2なんだけどさ」

なんなんだろうなこの気持ち。嬉しいのか虚しいのかよく分からない。

「とりあえずここから一旦別行動にしよう。リアルに戻りたいときはメニューのログアウトボタン押したら戻れるから」

別行動か。とにかくレベルをあげることに専念しよう。

「ん、分かった。戻るときは一旦お前に声かけるわ」

「はい」



そこから俺はレベルアップのため、遭遇したスライムをひたすら狩り続けた。

経験値は微々ながらも着々と溜められていき、今ではレベル8だ。

知らぬ間に森の深いところまできていた俺は、スライム以外のモンスターが前方にいることに索敵スキルの能力で気がついた。

危ない危ない。いきなり急襲されたらゲームオーバーだったかもしれない。

茂みに身を隠してそのモンスターの名前を頭上のバーで確認する。

『レッドハウンド』

見た目は野生の犬で、その名の通り赤い体毛を持ち、今も飢えた獣のように獲物を鋭い目で探している。

……ってあれ？　なんかデジャヴなんですけど。

よし、一回記憶を振り返ってみよう。

―――
　　〽振り返り中〽
―――

ああ、そうだ！　　昼間、ゾーンに二人と探索しにいったとき、俺が倒したモンスターだ。

名前も知らないで倒しちゃったけど、アレ雑魚モンスターだったのか。

ま、リアルで倒せたのだから、ゲームの中でも問題ないだろう。俺は、所詮雑魚、と思いながら右手に力を込める。

こちらに気づいたレッドハウンドが昼間と同じように土を蹴って襲いかかる。

だが、もう遅い。こっちはすでに充電完了だ！
右手が瞬時に紅蓮の炎に包み込まれ―――

―――るはずがなかった。

あ、やべ。ここゲームの中じゃん。

次の瞬間バウバウ吠えられながらボコボコにされ、薄れていく意識の中にゲームオーバーの血文字をみた気がした……。



「うおわあああああ！」

ゲームオーバーになった俺はどうやら自動的にリアルへ戻ってきたようだった。

被っているものをソファアに置いて、精神を落ち着かせる。確か、バウバウ吠える犬にボコボコにされたんだっけ。・・・トラウマになりそうだ・・・。

見ると夏穂はソファアに頭を乗せながらまだゲームの世界に入っている。今頃どこかの強モンスターとでも戦っているのだろう。

「・・・・・・・・とりあえず緑茶でも飲もう」

今は頭を落ち着かせたい。そう思い、ダイニングに足を運ぶ。

冷蔵庫の中に保存してあったペットボトルを一気に飲み干す。

ゴクッ　ゴクッ

「ぶはあ！　あー、生き返った」

かつてない程の爽快感が身体を襲う。正直緑茶をここまで美味しいと思ったのは初めてだ。

さっぱりとした爽快感に浸っていると、横から声が聞こえてきた。

「ちよっと兄さん、なに死んでるのよ！」

いつの間にかこっちに戻ってきていたらしい。夏穂はソファの上に頭を乗せながら信じられないといった口調で物を言ってくる。

「お、戻ってきたのか夏穂」

「戻ってきたのか、じゃないわよ！ あんな森の雑魚モンスターなんかじゃ普通絶対死なないのに……」

それは違うんじゃないだろうか。実際、俺が死んでるわけだし。

「いやいや、違うんだって。あの森の奥にさ、レッドハウンドっていう強いモンスターが潜んでたんだって」

その名前を聞いた途端に顔を下に向け、呆れたような口調になった。

「……レベル15以上になってから挑みましょうってガイドブックに書いてあったのみなかったの兄さん……」

どうやら勝敗は最初から決まっていたようだった。

E p i s o d e 4 (後書き)

次回からはこの物語の本筋に戻ります。

Episode 5 (前書き)

ついにストーリーが進みました！

Episode 5

次の日の放課後

「天江。俺はな、お前のためを思って言ってるんだ。宿題を出せ」
現在、職員室で俺は目の前にいる『醤油』こと阿野勇作に説教という名の脅しをされている。題材は出していない課題のことだ。だが俺だってやっていないわけじゃない。

「いや、先生の教科はキッチンと出しているじゃないですか」
そう、この教師の出す課題だけは出している。じゃないと殺されてしまうからだ（精神的に）。

「俺が言ってるのは他の教科のことだ！ お前は何一つ出してないそうじゃないか」

事実ではある。基本的に俺は課題が面倒だからほとんどは未提出だ。教師陣も俺には諦めているらしい。

「確かにそうです。けどね、俺にだって譲れないものがあるんです」

そうさ、俺にも譲れないものがある。

「ほう……それはなんだ？」

醤油が腰掛けている椅子がギシ、と音を立てる。

まだか？　と言いたげな醤油に迫力を覚え、一瞬肩が震えて、言葉を言うのを躊躇う。

「それは——」

頑張れ！　俺！　信念を貫き通すんだ！

「それは？」

醤油が繰り返して尋ねてくる。

「それは——」

さあ！　あと一息！

「ゲームのための時間です！」

職員室の空気が止まった瞬間だった。



ひどいめにあった。あれからというものの俺は別室に連れられ、今まで説教をくらっていた。なんなんだよ、正直に言っただけじゃないか。あそこまで怒ることもないだろうに。どうも説教の時間が長すぎて遙斗や楓はもう帰ってしまったようだ。今日はどうやら一人で帰ることになりそうだ。俺の足は教室で帰る準備をしたあと、玄関に向かう。

「……………ん？　なんだこれ？」

靴箱を開けると、なにやら手紙が入っている。

これはもしか……………

淡い期待を胸に寄せつつ、シールが貼られている封をとる。

『今日の放課後、いつでもいいので屋上にきてくれませんか？
待ってます』

天江一稀さんへ』

中にはそう書かれた便箋が一枚。ついに俺にも青春の予感がきたよ。

だが相手の名前がないのが少し気にかかるな。これで男性ってオチだったら嫌だよ俺。きつと焦ってて書き忘れてしまったんだろう。

いつでもいいと書いてあるのだ。せっかくだし、今行こうじゃないか。屋上でずっと待たせるのも悪い気がする。

ギ
イ
ツ

開けた途端に風が目に入ってしまった、一瞬目を瞑る。

目を開くと、そこには今まで見た中でも群を抜く美少女が立っていた。

「はあ」

改めて見てみる。黒髪のセミロング。整った顔立ち。豊満とまではいかないうち少し控えめな胸。スラリと伸びている足。まさしく美少女だ。

「といつても隣のクラスだから初めましてじゃないかもね。もしかしたら一回会ってるかも」

って、ええええええええええ！隣のクラス！？こんな美少女

「……その顔じゃあ私が同学年だったっていうことも知らないみたいね。……はあ」

俺はどれだけ隣のクラスを見ていなかったのだ。ここまで人の目を引く容姿をしているのに今まで気がつかなかったなんて。

「私の名前は岩崎奏。単刀直入に言うわ、私のチームに入って欲しいの」

は？

「あなたの能力のことは知ってるわ。ぜひそれを私たちのところで活用してほしいの」

な、なに？　なんでバレた？　この学校で平和な学生生活をするため口外したことは一度もないはずだ。

「……ど、どこで俺のことを知った？」

「うちのチームに入れたいと思ったのは昨日。善は急げってね」
昨日といえば俺が森の中で能力を使った日だ。もしや監視してたのか？

「元々能力者の気配させてたから、いつかはこうやって誘ってたの。けど昨日のを見て、ね」

どうやら気配こそしなかったが、昨日のことは全部見られていたらしい。俺の能力のことも全部。

「そ、そうかよ。確かに俺はお前らの言うところの『能力』が使える。だが、えーと、岩崎さんとやら、お前はどんなんだ？　能力が使えるのか？」

「私？　ええ、使えるわよ」

……ここで使えないことを疑ってもしようがない。ひとまずは信じることにしておこう。

岩崎は屋上のフェンスに寄りかかりながら説明を始めた。

「……この能力はね、世界革命の大惨事によって私たちの眠っていた才能が目覚めた結果なんだって」

岩崎がいった大惨事とは、『怪物の行進』のことだろう。あのことは鮮明に頭の中に残っているが、正直あまり思い出したいくない。

「あのとき、家族を助けたい、生き延びたい、愛する人を失いたくない、それぞれがそう思ったはず。その思いに呼応するように生まれたのがこの能力らしいの」

……衝撃の展開だ。愛の告白ではなく、まさか自分の能力の起源を知ることになるとは。

「能力を手に入れた私たちは、次第に集まっていた。それが私たち『黒い絆』よ。といってもそれが総本部で、下に何個も組織が

あるんだけどね。私の入ってるチームもそのうちの一つよ。名前は『暁の彗星』」

「はは、やけに中二病っぽい名前だな」

こんな状況でも笑いがこみ上げてくる俺は可笑しいのだろうか。

「しょうがないじゃない。ウチの隊長がそういう人なんだから」
なんか興味わいてきた。今度会ってみたいな。だがそれは入隊と同義だ。少し頭を落ち着かせろ、俺。

「俺もホント何がなんだかよく分からないんだ。整理させるためにもとりあえず時間くれ。一日、一日でいいから」

岩崎はその返答を予想していたかのように自分の言葉を並べた。

「まあ、そりゃそうよ。確かにこんな話いきなりされてもね。本当に一日でいいの？」

「明日までにはキッチンと決めておくから」

「……そう、分かった。明日放課後になったらクラスに迎えに行くことにするわ」



一人あの後寂しく家に帰宅した俺はベッドに突っ伏していた。

あの話はなんだったのだろうか。俺なんかをチームに入れて何がしたいのだろう。いろんな疑問が頭を取り巻く。

悩んだ末、俺の出した答えは――――。

E p i s o d e 6 (前書き)

今回はちょっと短いかもしれません。

Episode 6

翌日

学校での授業はほとんど耳に入ってこなかった。
代わりに考えていたのは、昨日の岩崎の話だ。

———単刀直入に言うわ、私たちのチームに入って欲しいの。

正直自分の中ではもう答えは決まっている。考え抜いて出したものだ。後悔はしない。

キーン コーン カーン コーン

最後の授業終了のチャイムが鳴り、生徒の雑談話がちらほらと聞こえるようになる。

「あんた、今日どうしたの？ なんかずーっとポケットしてるし俺にも周りと同じように楓から声がかかってきた。だが、他と違うのは心配そうな口調をしていることだ。」

「大丈夫だから。別に考え事してただけだし。ていうか心配されるほど俺の顔は呆けてたのか？」

自分としては確かに授業は聞いちゃいなかったが、受ける姿勢だけはとっていたはずだ。

「そりゃあもう。横からみたら丸わかりよ。もうなんか心ここに
あらずって感じだったわ」

客観的にみた今日の俺はひどいようだった。おかしいなあ、そこ
まで顔に出してはいなかったはずだけど。

「おら、ホームルーム始めんぞー」

突如クラス全体に響いた声の主は、少し熱血が入っているウチの
担任だった。辺りで雑談を交わしていた生徒が早々と席に着く。
楓もまだ話しかかった様子だが、渋々という感じで席についた。

このホームルームが終わったらまた岩崎とご対面だ。今から心の
準備をしておこう。

「起立！ 礼！ さよーなら！」

クラスに日直である山崎くんの野太い声が響いた。

さて、いよいよだ。昨日岩崎がクラスに迎えにくると言っていたが、
掃除の邪魔になってしまうから廊下で待つことにしよう。

俺は鞆を持って、そそくさと教室を出る。

「ちょ、ちょっと待って」

教室を出て行く俺を慌てたように呼び止める楓。まったく、なんな
んだよ。

「あの、疲れてるんだったら、気晴らしに街に出かけない？」

……俺のことを心配してくれてるのか。心で少し鬱陶し
く思ったのを取り消す。日ごろの感謝も込めて、今度一緒に街に出

かけたときは駅前のケーキバイキングでも奢ってやろう。

「今日はちょっと用があるんだ。ゴメンな」

「……そう。ま、まあ今度空いてる日があったら言うて！　いつでも付き合うから！」

そ、そこまで強く言わなくても。そういつて階段を下りていく楓は、俺の気のせいかもしれないが少し落ち込んでいるように見えた。
——まあ楓のおかげで緊張がほぐれた。ありがとな。

俺は心でそう思い、廊下の壁に身体を寄せる。もうそろそろ来るだろう。俺は気合いを入れるために、頬を——。

「おいっ、一稀！　これは………どういうことだあああああああああああああああああああ！」

遙斗の怒声が廊下に轟いた。やかましいな、おい。今度はなんだよ。

「お前！　いつウチのクラスの岩崎さんと知り合いになったんだ！　お前のようなぐーたらゲーマーにあの方と接点があるとは思えない！　一体どんな魔法を使ったんだ！」

ぐーたらゲーマーとは失礼な。確かにゲーマーは否定しないが、ぐーたらは否定するぞ。そんな俺の心の叫びを無視して遙斗は一方的に話しを続ける。

「さっき、お前とは仲がいいのかって聞かれたんだ！　女子ランキング四位の岩崎奏にだぞ！　さあ、白状しろ！」

胸ぐらを揺すられながら答える。

「別に………なにもないって」

「嘘つけえ！！」

あー、うざったい。確かに知り合いだといえばそうだが、昨日初めて会話した知り合いだぞ。それに知り合ったきっかけは常人には理解しがたいものだ。白状なんてできやしない。

俺がぐらんぐらん揺すられていると、問題の人物が隣のクラスからひよっこりと現れた。

「天江くん、遅くなってごめんね。今掃除が終わったとこだから
ちょうどいいところに！ 助かった！

隣のクラスから出てきた岩崎はとことここちらに走ってくる。
少し大人びた印象を持っていたので、なんていうかギャップがすごい。

その姿を見た遙斗の手が緩む。抜け出すチャンスだったんだが、
岩崎に目を奪われた俺の身体は思うように動かない。

「ほら、行くわよ」

岩崎がぐいぐいと俺の手を引っ張る。

「ちょ、待って」

俺は横目で後ろを振り返る。

そこには、信じられないものを見てしまった、というような顔を
した遙斗が呆然と突っ立っていた。



ギッ

昨日と変わらずボロい音を出す屋上の扉を開いた。また風が目
に入り、目を瞑る。ここはいつも風が強いな。

「さあて。あなたの答え、聞かせてもらおうよ」

岩崎がフェンスに寄りかかりながら言う。

「わかった」

頷いた俺は何故かたたずまいを直す。

「————チームに入らせてもらうよ」

これが、俺の答えだ。

その答えを聞いた岩崎は目を細める。

「後悔はしない？」

「これからさき、するつもりはないさ」

リスクがあったとしても、それを十分凌駕するメリットがあると思う。

それに、俺はもしかしてこの転機を望んでいたのかもしれない。

その答えに満足した岩崎は一瞬目を瞑りコクと頷いた後、俺に笑顔をみせた。

「————ようこそ『暁の彗星』へ！　あなたを歓迎するわ！」

Episode 7 (前書き)

夜中書いたからちょっと文章が見苦しくなってるかもしれませんが。

Episode 7

夕暮れ時。

「ここは．．．．？」

屋上で答えを出した俺がまず連れられたのは、部室棟の部屋の前だった。岩崎曰く、「まだ日も沈んでないから隊長が学校に残ってるの。せっかくだから会いに行きましょう」とのことだ。

昨日の会話でその『隊長』とやらは子供っぽいということが分かっている．．．．俺は会ってからどういう反応をすればいいんだろう。

「ここは、平たくいうと私たち『暁の彗星』の本拠地よ。言っておくと、メンバーは全員この学校の生徒なの。集まるのが怪しまれないように名目上は一応部活になってるわ。名前は『彗星部』」

「彗星部!？」

俺は素っ頓狂な声をあげた。メンバーが全員この学校の生徒ってことにも驚いたが、彗星部ってなんだよ!

「『地域住民、生徒が困っているとき、彗星の如く参上し、救いの手を差しのべる。』これが私たちの部活動よ。略して彗星部」

「う、うさんくさすぎる．．．．．」

あまりに謎すぎるだろ。正直これで部活の申請が通るとはとても思えない。

「よく部活申請が通ったな」

「私たちは悪くいえば政府の手先だもの。学校のお偉いさんは黙認してるってこと」

学校に圧力加えたってことか! 何気にすごいな、彗星部!

俺はここに来るまで疑問だったことを口にすることにした。

「そういえば隊長ってどんな人なんだ?」

岩崎はどうやって答えればいいか考え込んでいる。

「んーとね、一言で言っちゃえば、マイペースな人ね」

マイペースな人なのか。この壁一つ超えたところにいる隊長とやらにますます興味がわいてきた。

「なんか興味わいてきた」

「ん。じゃあなんだし、もう開けるわね」

……… ついに『隊長』に会うのか。緊張するなあ。

ガチャン

岩崎が木製の扉を開ける。

瞬間、俺の目に映ってきたのは――――

――――椅子に座りながら、無邪気にマンガを読む子供と、その隅でパソコン作業に没頭している大人びた女性だった。

小さい子供の方は、赤髪のポニーテール。前髪のかかった大きい猫のような目。マンガが面白かったのか無邪気に笑みを浮かべる口。中学生のような体型。

絶句する俺は、いつも通りといった表情の岩崎に疑問をいった。

「ここは………中学校じゃないぞ！」

岩崎はこちらに顔を振り向かず、言い慣れた感のある台詞をいう。

「あの子は真正銘の高校二年生よ」

驚きの新事実！ 先輩だったのかよ！

「嘘つけっ！ あれ絶対高校生じゃないだろ」

「失礼なっ！」

俺が見たままの感想を述べると、批判の声がとんできた。

「まったく………カナ、そいつが今日連れてくるって言うてたやつかー？」

案の定、声も子供っぽいな。

「うん、そうよ」

カナ、とは恐らく岩崎のことを指しているのだろう。奏だからカナ、か。今度これだからかってやろうかな。

「アタシは二年の水野明梨。アタシのことは皆隊長って呼んでるからそれでいいよ。お前は、天江一稀だっけ？ カナ、合ってる？」

いや、せめて引き込む人材の名前くらいキチンと覚えておこうよ。

「あってるわよ隊長」

楓がそう返す。

「うむ、お前の名前は今度から『ツキ』って呼ぶから」

………俺は声を出せずに横の岩崎を見る。

「誰にでもこんな感じだから」

それに気づいたのか、岩崎は小さい声で俺に教えてくれた。その間にも隊長の話は続く。

「まあカナが見込んだんだ、今更チームに入るのを拒みはしないよ。てことでこれ書いてくれたら話が早いのに」

そういつてゴソゴソと大きい机の引き出しの中から出したのは入部届だった。

「これは入隊の意思表明みたいなものよ。あんまり意味ないんだけどね」

俺は岩崎の説明を受け、とりあえずサインする。

ここまで喋ってないが、そろそろ聞きたいことがあった。

「隊長さん。本当のところ、この活動内容ってなに？」

隊長は目をパチクリとしている。まだ教えられてなかったのかと言いたそうだ。

「まだカナから言われてなかったの？ まあいいや。ここがやるのはモンスター討伐とか。他にもいろいろやるけど基本的にはそれがメインだよ。少ないメンバーも今日はたまたまそっちに行っちゃってるし」

「隊長は向かわなくていいのか？」

「アタシ？ アタシは隊長だからな！ それは問題ナッシングだよツッキー」

なんかまた俺のあだ名変わってるし。それに向かわない理由が隊長失格だろ。

そう思っていると、パソコン作業に没頭してた女性が初めて声をあげた。

「今日はゲームをするために休んでるんですよ隊長ったら。初めてまして、私は同じく二年の渡来莉桜わたらいりおです。彗星部の主に会計をしています。以後お見知りおきを」

ずっと部屋に入ってから何も言わなかったんで、てっきり無口な人かと思っていた。だが、どうもそういうことではないらしい。

「ど、どうも。初めまして、天江一稀です」

こちらの女性を見るからにしっかり者だ。黒髪と眼鏡が異様に似合っている女性で、印象的には清楚な感じを受けた。……………隣の中学生のような隊長と同学年とは到底思えない。

「はい、もうこの件は終わり！ カナー、昨日のゲームの続きしようよ」

ええ、もう終わり？ 早くないっすか？ 呼ばれた岩崎は「はいはい」とため息をつきながらも部屋の隅にあるテレビに向かった。

「ちょ、隊長、俺の件もう終わり？」

「うん、そうだよ。だって話すこともうないじゃん。入部届は書いてくれたんだし、かといって今からじゃもうモンスター討伐は時間が遅い。てことで細かいことと、自己紹介は皆集まる明日にするよ。ほら、ツッキーも一緒にゲームやろ？」

こっちまで駆け寄ってきた隊長に腕を掴まれ、無理矢理テレビの前の椅子に座らせられた。別と呼んでくれれば行くっての。テレビに映し出されたタイトル画面を見て俺は思い出す。

『Blood of Last』

「お、これ、俺も持ってるゲームだ」

これは、妹と一緒に一昨日やったゲームだ。今でもあのトラウマは心に残ってるぞ。

「これね、『黒い絆』に所属してるチーム全部に配られたゲームよ。何故かウチの隊長がハマってしまったわけ」

岩崎が説明してくれる。こんなゲームになんでハマったんだろうな。政府も政府だよ。ゲームに予算かけるんだったら俺の家の前にある壊れかけた街灯取り替えろっての。

「ツッキーも持ってたのか！　ならツッキーも入れて三人でプレイしよう！」

いつのまにか俺もゲームすることになった！　たしか

にマイペースだなこの人！　周りの人間を自分のペースに呑ませる天才だよ！

かくして俺は入隊初日から何故かゲームをして遊んだのであった。
.....



「あー、疲れた」

学校を出ると、すっかりもう夜だ。あれからゲームの中にダイブし続けた俺たちは、時間がたつのを忘れて楽しんだ。俺にはめでたいことに新しくトラウマができてしまったんだけどね。

「確かに疲れたわね。けど明日からはもっと疲れるわよ？」

一緒に学校をでた岩崎と、途中まで一緒に帰る。よし、少しからかってみよう。

「まだ体験してないから分かんないなあ、カナちゃん」

苦笑混じりにさっきまで隊長が呼んでたあだ名でからかってみる。どんな反応を見せるかな。

「ちゃん付けはやめてよ。他のメンバーは、奏って呼んでるんだけどな。まあ、カナならいいわよ？」

ふむ、正直どっちでもいいんだけど。まあどうせならカナのままでいいや。

「じゃあ俺、カナって呼ぶことにするわ、お前のこと。その代わり俺のことツッキーって呼んでくれてもいいぞ？」

「いや、それは遠慮しとく。．．．．．まあ、カナって呼ばれるんだったら私はあなたのこと一稀って呼ぶわ」

なんだか互いに変な意地を張ってしまったようだ。．．．．．つと、もう家のすぐ近くまでできてしまった。時間が経つのは早いもんだな。

「はあ。じゃあ俺、家こっちだから。．．．．．じゃあな、そしてこれからよろしく、カナ」

明日から俺はこいつの世話になっていくんだろう。

親しみの感情を込めて、俺はカナと呼んだ。恐らくこれからのその呼び方は変わらないのだろうな。

———カナは、クスリと笑ったかと思うと、こちらに手を差し出し握手を求めてきた。

「こちらこそ。これからよろしくね、一稀」

俺は慣れない握手をして、彼女にしっかりと頷いた。

「—————ああ」

カナ。初めて呼ぶその名は何故か胸を暖かくするものだった。

Episode 8

「ふうー、よく皆真剣に授業を受けれるもんだ」

隊長と会った次の日、俺はいつも通り愚痴を漏らしながら授業を受けていた。

「そりゃあ、期末テストが近付いてきてるからでしょ。誰だって夏休みを補習で埋めたくないしね」

隣の席の楓が、事情を説明してくれる。期末テストが近いのは確かだ。

「あんたも今のうちにやっとなないとテストやばいかもよ。それとも鬼の補習を好きこのんで受けたいわけ？」

「んなわけあるか。俺のことはほっとけっての」

あの鬼教師の補習など恐ろしくて想像したくない。

それよりも、連日あったことを昨日頭の中で整理してたからかなり眠い。

「まあいいや。今日は寝不足なんだ。放課後起こしてくれ。おやすみ」

「あんたねえ。今の私の話聞いてた？　・・・・・・・・　ってもう寝てるし」

呆れながら嘆息している楓の姿が意識の落ちそうな俺の目に映った。

もう．．．．．無理だ．．．．．

俺は襲いかかる眠気に身を任せた．．．．．



放課後になり、誰もいなくなった教室の中、二つの声が聞こえてきた。

「．．．．．ちょっと一稀。起きて、もう放課後よ」

「岩倉。俺に任せてくれ。いい方法があるんだ。一発で起きるさ」
誰かがなにか話してる。

「やってみて」

「うむ。俺の一撃必殺技、くらえ！」

なんだ？ 今話してるのは遥斗と楓か？ つーか今聞こえた一撃必殺ってなんだ？

瞬時、遥斗は大きく息を吸いこんだ。

「な、なんだアレは！？ あそこに落ちているのは．．．．．
エロ本！？ 一稀、起きろ！ 一大事だ！ エロ本があそこに転が
ってるぞ！ さあ一緒に取りに行こう！」

マジか！？ ってそんなバカな。

目を開けると、鳩尾をやられたらしい変態が床に横たわっていた。
どうやら自分の身が一大事になってしまったらしい。

「だ、大丈夫か!？」

だが意識を失っている変態は何も答えない。

「まったく・・・変なこというからよ」

「お、お前がやったのか楓」

寒気が走る。

「大丈夫、それほどしてないから」

「別にエロ本くらいで・・・惨すぎる」

楓は怒らせないようにしよう。この遥斗をみたらそう思ってしまう。

楓との会話にはもっと気を遣おうと俺が思っていた頃、突然扉が開いた。

「あのー・・・一稀はいますか？」

声の主はカナだった。きっと今日も迎えに来てくれたのだろう。

「か、カナか」

その横で楓は何か考え込んでいる。

「あの人・・・確か隣のクラスの・・・岩崎さん。」

・・・ねえ、あんた岩崎さんとどういう関係なの？」

俺に聞かれても。うーん、悩むところだ。チームの仲間？ いや、

楓には通じない。

俺がうなっていると、カナが横から割って入ってきて答えてくれた。

「一稀とは一昨日知り合ったばかり。ただそれだけ。それ以上でもそれ以下でもないわ」

すっぱりと言い切るカナ。確かにそれだけだけど、もっと重大な部分が抜けてるだろ。

「うそっ！　じゃあなんで呼び捨てなのよ！」

そんなところに引っかかるのか。特別意味なんてないんだけど。

「それは・・・成り行き上?・・・一稀、隊長を待たせてるから行かないと」

隊長を待たせちゃってるのか。急ごう。

「楓ー。俺ちよつとこの後用事あるから。それじゃっ!」

このままだと面倒なことになりそうだ。俺は返事を聞かないまま、鞆を持って教室をでる。

「ちよつと! ちゃんとしたワケ聞かせてよ!」

教室から聞こえてくる楓の声を無視して、俺は彗星部へ走った。



「よお。遅かったな、新入部員」

部室の扉を開けた俺を待っていたのは昨日の二人を入れて、五人のメンバーだった。

隊長は以前と同じ椅子に座りながらお菓子を食っていて、渡来さんはパソコンに向かい合っている。

他の三人は見かけたことのない顔だ。

俺に話しかけた男は茶色のさっぱりとした髪型で、タンクトップを着て週刊誌を読んでいた。

後の二人は女性で、一人は隅にあるベッドで、すうすうと寝ている。髪は肩までしかかからない長さの白色で、見るからにのほほんとしているやつだ。

もう一人は地毛か分からないが金髪でかなりの美少女。メイド服で給仕をしているが、なんていうか無愛想な人だ。

「……カオスだ」

俺は率直な感想を述べた。だってこの部室、端から見たら絶対カオスだよ。……これから俺もカオスの一部となるのか。

「確かにそうだけど口にしちゃダメ。みんなー、連れてきたわよー」

カナが全員に声をかける。皆がこっちを振り向く。

「自己紹介、自己紹介」

カナが俺に小声で言ってくれる。よし、俺もなにか自己紹介しないと。

「初めまして。天江一稀です」

よし、言った。けどこれから何を言えばいいのか思いつかない。いきなりここで自分の能力のことを話すのか？

そう思っていると、最初に話しかけてきた男から声が返ってきた。

「俺は井上大河だ。好きなものは隊長。嫌いなものは特にないな」

好きなものが隊長ってなんだよ！ ロリコンか！？ お前はロリ

コンなのか！？

だが、皆それがいつもの光景といった風だ。……俺がおかしいのか？ 否、そんなはずない。

俺が一人戸惑ってる中、自己紹介は続いていく。

「私は逢原瑞月あいはらみづきです。見てのとおり、メイドをしております」

淡々といった口調。ていいうかなぜメイド？ 現実にはありえんのだろ。

「わたしは稲村結衣です。よろしくおねがいますー」

ぺこ、と頭を下げてくる。それにしてもものほほんとしたやつだなあ。けどそれが何故か可愛く思える。

「アタシ達のことは知ってるから別にいいとして。自己紹介も終わったんだし、今日の予定は新人研修も兼ねてちょっとしたモンスタ―討伐に向かってもらう！」

自己紹介が終わったとたんに隊長から指令が下された。入隊二日にして討伐か。もったんか訓練とかあるのかと思ってた。

「イノちゃん！ 結衣ちゃん！ 君たち二人にはツッキーと一緒に向かってもらうよ！」

「はい、隊長！」

「むにやむにや・・・まだ眠気がとれないよう・・・」

イノちゃんて。俺のツッキーと似たり寄ったりだな。

二人の反応はそれぞれだ。井上なんかは敬礼していて、稲村は目をこすりつつも頷いてくれている。どうやら同行してくれるようだ。

「じゃあねえ、今回はこれに行ってもらおうかな。《メタルベア 一体討伐》新人くんも頑張ってるねー」

モンスター討伐初めてだというのに頑張れというんですか。さすがに無茶ですって。

みると、タンクトップだった井上はすでに上着を着て準備を整えていた。稲村も眠そうな目で、準備を整えている。

「はい、認証完了！ いつでもいつてらっしゃーい」

ニヤニヤと何故か隊長は笑っている。よく分からないなあ。

「一稀、頑張ってきてね。隊長とゲームして待ってるから」

「おう」

笑顔で見送ってくれるカナに頷く。

「天江。このドアの前で待ってろ」

井上に言われて、部屋の隅に置かれている少し古ぼけたドアの前に立った。いったいこれは何なのだろう？

「これは俗に言う『瞬間移動装置』です。ドアを開けた先には指定された空間が広がっています」

逢原が教えてくれる。

す、すげえ！ そこまで科学が進歩していたとは！

「もっとも、これは空間法則をねじ曲げるものなので、あまり軽々と使えないのですが」

「それにしても・・・こんな未知の利器があるとは」
かなり驚いた。実際普通に暮らしていたら存在すら知らなかった
だろう。

「よし、準備は整った」

井上の準備が整ったらしい。もうそろそろだ。

「天江。言い忘れてたけど俺の嫌いなもの、一つあったわ」
その言葉を聞いて、俺は唾を飲む。

「――――モンスターだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9177z/>

World Revolution!

2012年1月7日03時50分発行